

守る 創る 緑

笠 康三郎



りゅう こうざぶろう / 1952年、四国松山市生まれ。北海道大学農学部卒業後、園芸コンサルタント、札幌市緑のセンター、(株)スペース・デザイン工業を経て、現在日本データーサービス(株)技術顧問、(有)緑花計画代表取締役。北海道景観アドバイザー、北海道北のまちづくり賞選定委員会委員、札幌市都市景観審議会委員、札幌市大通花壇コンクール審査委員等を歴任。

(はじめに)

「旭川市を緑にする会」初代会長の重岡先生は、私の郷里の大先輩であり、大学の研究室ができる前の最初の卒業生にあたる方でありまして、私が25年前に札幌市の緑のセンターで働いていた時に「北国の園芸」という雑誌のお手伝いをしていた関係で重岡先生にお会いする機会がありました。当時から常緑の針葉樹の大切さということで、特にヨーロッパクロマツの魅力について熱心にお話をいただいております。今日のお話をいただいたのも何かのご縁かと思ひまして、30周年記念という節目の会で、少しでも先生に恩返しといひますか、緑の関係でお役に立てればということでお話をさせていただきます。

25年前の月刊誌「北国の園芸」の中で、当時、「緑の市民会議」という名前と呼ばれていた「旭川市を緑にする会」の活動の内容が紹介されています。まだ、少なくとも緑化というものが「とにかく木を一生懸命植えよう」という時代の中で、いろいろなたくさんの活動を始めたということがこの中から窺えます。



(公共スペースにおける緑化の役割)

緑化というものを考える場合に、公共スペースの緑化は実に大きな役割を果たしております。

例えば旭川市で言えば、市の施設や小中学校、道・国の関係施設や道路を含めると公共スペースと呼ばれるものは4割近くを占めると思ひます。そういった施設の中の緑は、やはり大きな割合を占めています。街中に緑がなかなか見えてこない理由として、大きな木が少ないということが一番大きな問題になっていますが、宅地の中に大きな木はなかなか育てられません。ある程度面積が確保できる公共スペースで大きな緑を造ることが、街中で緑を増やすポイントになるのだらうと思ひます。ところが今の公共施設は、建物を建てて駐車場を確保すると、木を植えるスペースがせいぜい敷地回りに一皮しかありません。周りにぐるりと木を一行植えて終わり、というスタイルが非常に多くなってしまいました。

もう一つ、公共スペースは誰のものかを考えた場合、道の施設であれば、管理者は道ということとなりますが、税金で維持していくことを考えれば、納税者である私達が、緑化というものに対しては、もっと意見を言ってもよいのかなと思ひます。

例えば、ガーデニングの街で有名になった恵庭市では、「自分の家の前を綺麗にすることは自分たちの役目だ」、「街路樹を自分たちが世話をするのも当然だ」という意識を非常に強く持っています。役所に任せておくということではなくて、自分達で少しでも良くしていこうという意識が、今の恵庭市の一つの原点になっているということです。

そういった意味での公共スペースのあり方を見直してほしいと思ひます。

(緑の質と大きな緑の確保)

札幌市の教育委員会が出している本の中で、未来の札幌に残したいものを書いてほしいということで、私は緑について記述しました。この時に思ったのは、今まで創っていた緑は、本数、量を植えなければならなかった。一生懸命木を植える時代だったということです。質というものを考えてこなかったというより、優先していなかったということです。北海道という土地は近くに緑がたくさんあるために、街中に木を植えられると、「除雪がやりづらい」、「車の出入りの邪魔になる」、「看板が見えない」と目先の利益だけで緑を考えてしまい、総論では緑はあってよいのだけれども、自分の家の前だけは街路樹は欲しくないというのが実はよく言われることであります。果たしてそういうことで良いのかなというのが私の中になりました。

私の子供は3人いて、もう既に中高生と大きくなりましたが、私の周りには自然が多かったために比較的恵まれた環境の中で育ちました。しかし、街中の子供にとってみると、緑というものは、ただそこにあるだけのもので、そこには虫もいなければ、セミも飛んでこない、トンボも来ない。そういう風になってしまった時にそういった子供達はどうなるのだろうかというのが、最近頻発するいたましい事件を耳にするたびに、非常に怖い思いをしております。そういう中で街中に少しでも本物の緑を造っていくべきではないだろうかという思いがあります。

これからは、やはり緑の質を問うべきであろうと思います。北海道はとにかく街中に緑が少ない。私は四国で生まれ育ち、四国から九州そして北海道に来たのですけれども、とにかく街中が殺風景という印象を持ちました。

しかし、街中で大きな緑を維持するのは非常に難しいということが現実にあります。

(緑は町の記憶)



札幌市東区に大学村の森という小さな緑地があります。もともとは北海道大学の公園ということで文部科学省の管轄の緑地だったところを、札幌市が買収して都市緑地という形で今年の春からオープンしました。

20年前、この地区には、ハンノキやハルニレの大きな木がたくさんありました。道路整備で道路の真ん中にある木を切らなければならないということになった時、ある少女が、当時の市長に「この木を切らないで」と手紙を書いたことがきっかけで、この木は条件付で残されることになったのです。この木は交通の障害になるということで、警察の方としては絶対切らなければならない。もし

ここで事故が起こったら即伐採という条件が付けられました。この木が現在道路の真ん中にあるわけですが、これはまさに最近よく言われるスローライフを実際に現しています。ここに木があり、道が曲がっていれば車は当然スピードを落とすわけで、そうすれば当然事故が起こるわけがない。もしこの木がなかったら、ただの普通の交差点でかえって危ないのではないかと思います。

このように、地元の人が熱心に木を残したという歴史のある地区に、大学村の森がありました。かなり古い木が茂った緑地で、ここをどういう緑地にするかということで、私もお手伝いしました。今は総合的な学習の場として利用されている緑地ですが、当時、ここに隣接する人達は緑地を残すことに大反対でした。葉っぱが飛んでくる、虫がわく、薄暗くて不良がたむろする。住民説明会では、一時は本当になくなってしまわないかというくらい猛反対がでました。一方で、少し離れた地域の人達は、子供達にこういったものを残すのがこれからの役目なのではないかということで「大学村の森を守る会」を自主的に作り、自らがこの緑地の清掃などを始めました。野草の苗を植えたり、下草を刈ったり、子供達に樹名板をつけてもらうなどの地道な活動を何年か続けてきて、反対していた隣接地域の方々も協力してくれるようになりました。

整備についても、芝生をきれいに刈り遊具を置いて利用する部分と、草を残す部分にエリア分けをしています。草をきれいに刈ってしまうと虫も寄らないのです。ある程度残しておくことで、虫や鳥が集まってくるのです。この緑地を、ただの緑色に見えるだけの緑ではなく、虫も鳥も集まってくるような本物の緑にしようという地道な活動を続けています。それもやはり、役所に言われたからやるというよりは、自分の子供達に何とかそういった環境を残したいといった自発的な活動で行われています。その活動により、反対していた地域の人たちも協力するようになりましたし、隣接する学校が、一時は危険な区域ということで立ち入り禁止にしていたのですがそれも解除になり、児童会館の子供達も日常的に遊べるようになりました。ただ役所にあれこれ文句を言うのではなく、実際に自分達でやっていきたいということで、役所の管理に協力しお互い補完しながらの管理がようやく動き始めようとしています。

(環境や地域特性に応じた緑化樹の使い分け)

今まで、木を植えるときにどうしてもサクラって出てくるといいたいですね。旭川は風がないからまだ良いのですが、札幌で植えようと思ってもまともに育つところは非常に少ないのです。しかし、札幌でもやはり新しく植える街路樹の地元や町内会からの要望はほとんどサクラになってしまいます。ところが街路樹のサクラに今非常に困った状況が起きてきている。テングス病というサクラの致命傷です。この病気が入ると満開の時期でも花が咲かなくなります。あるいはコブ病という病気が札幌ではものすごく蔓延していて、サクラの木はどこもぼろぼろ状態です。サクラはどうしても病気に弱いという宿命がありますし、街路樹ではどうしても傷を負いやすく、そこから病気が入り、長く生きられません。初めは生長がよいのですけれども長続きしないというのがひとつの欠点ですね。



サクラを植えてはいけないわけではありませんが、やはり木というのはいろいろな種類、性質があります。その中で一番その土地に長く生き続ける木、例えば旭川だとカシワやミズナラ、センノキなど、そういった200年とか大台を生き抜くことができる木というのがあります。そういう木が常磐公園や護国神社、神楽岡公園などに残っている。私達が緑化で実際に扱う木というのは、添景樹種と言われる花、紅葉、葉、実の特徴を持つ樹種などで造園木に入るわけです。ただしこれらの木は残念ながら長生きをしない。旭川のシンボルツリーのナナカマドですが、街中の環境だとせいぜい50年、札幌では街路樹のナナカマドのサイクルは30年を切っています。20数年でほとんど植え替えなければならぬくらい傷んでしまいます。どうしてもサクラとかナナカマドやコブシのようなきれいだけれど長生きができないような木ばかりでは困るわけですね。

昔、街路樹にアカシア、ポプラ、ヤナギとかをいっせいに植えた時期がありますが、生長が早すぎるために剪定を繰り返さなければならぬとか、中が空洞になって急に倒れてくるといった、管理の問題が多くでてきています。札幌でも、アカシアの街ということで一時期たくさん植えたのですけれども、そのおかげで大変な目に遭い、アカシアを新規では植えないということになってしまいました。あるいはシラカンバですが、一時期北海道らしいということで植えたのですけれども最近花粉症のことで目の敵にされてしまいました。花が咲かないように丸坊主にされ、ズタズタになってきています。それからポプラも長くは生きるのでありますがなかなか維持するのが大変といった樹種になります。こういった樹種はたくさんありますけれども、使い分けをうまくやっていかなければなりません。緑化樹で普段扱う木の中でも、そういった木の種類をある程度分けて考えていかなければ、長生きできない緑になってしまうということが今ひとつの問題だろうと思います。

実際どんな木があるかといえば、旭川では、シナノキ、イタヤ、あるいはナラ、カエデの類ですね。もう少し湿ったところであればハルニレ、ヤチダモあるいはカツラこういった水気を好むものが良く育ちます。

「北海道は半年が葉っぱのない時期なのだから常緑樹を巧く使う」というのが、重岡先生の持論だったのですけれど、冬でも大きく緑を保てる樹種を効果的に配するというのは公共スペースの広いところでは十分できるわけですね。

札幌も一時期街路樹に常緑樹を使えということで植えた時期があります。ヨーロッパアカマツの街路樹なのですが、雪が乗かってドンと落ちるのでやめた方がよいということになって結局やめました。こういったものが効果を発揮するのは、中央分離帯とか大きな緑地帯でないとなかなか難しいと思います。

(誇りをもって取り組む緑づくりと厚みのある緑づくり)

緑を創る場合の問題という点で、ある道路では、片側は民家がないので街路樹が植わっていますが、反対側は民家があり、植え枠があっても植えられない。道路を新しくすると街路樹がどんどんなくなってしまうということが起きています。神楽岡のプラタナス通りのようなその街の風格を出す街路樹というのは、実は道内にほとんどないのです。ですから、本当に北海道一の街路樹、全国でも有数の街路樹だろうと私は思います。こういったものはやはり街のシンボルだということで住む人がそこに誇りを持つような緑というのを育てないと、先ほどのような自分の家の前には邪魔だからと言って木を植えないというのは、見ていて寂しいなと思います。



実際に神戸であったのですが、無剪定でプラタナスを大きくすることを80年代からずっと取り組んでいました。この通りは実は震災のときに非常に民家が倒れたのですけれども、ここで倒壊防止に役立ったということで、この街路樹が見直されました。また焼け止まり効果という面でも緑は大事だということ言われています。

木を大きくするといっても、街路樹でできない場合には、学校の敷地内や大通のところを無剪定にして緑にするなどの工夫が少しずつ出てきています。やはり公共スペースでゆとりのある所に大きな緑をつくり、「厚みのある緑」にすることが、これからの街の風格を出すのではないだろうかと思います。

緑の質というのを考えた場合には、見てくれだけの問題でサクラに偏らないでバランスのとれた樹種の選択をしていかななくてはならない。また、いわゆる木だけではなくて、鳥やリスが住める豊かな緑にする。そういった生きた緑になったときに初めて本物の緑といえるのではないかなという気がします。

そういったものを創っていくことが、次の世代に残せる緑を創ることであり、胸を張って引き継げる緑になるのだということで、ちょうど30周年という節目の機会にこういう話をさせていただきました。私自身も札幌、北海道に来て32年程経ち、いろいろな緑の仕事をやってきましたけれども、やはり何とか少しでも質の高い緑を残していきたいと夢は持っておりまして、いろいろな機会を通じてこういった話をさせていただき、ボランティアで木を植える活動を始めています。そういった緑の活動が全道各地に広がれば、本当に北海道がどこまで行っても隙間なく緑になっていく、そういった豊かな場所になるのではないかとということで、これからも少しずつ努力をしていきたいと思っています。

今日は30周年という節目の記念の場所をお借り致しまして、いろいろ話をさせていただきましたけれども、この会が次のステップとして、これからもまた発展し、旭川の街もまた豊かな緑になることをお祈りしまして、私の話を終わらせていただきます。